

スクープ! 次期フォレスターは2L直噴ターボの快速SUVだ!!



ホリデーオート

86×BRZ 初めての峠試乗

2台まとめて公道デビューいたしました

2012

5

定価 350円



追跡! 86&BRZ用 開発計画

アフターパーツ チューナー&プロショップ
19社の最新動向



フィットハイブリッドに
走りの“RS”が新登場



続報!

スープラ 後継車は ミッドシップ×4WDだ

真相はここにある

好敵手図鑑
最新スポーツカー

NSX×エマージ×LF-LC



バーチャル対決

ランボルギーニ アヴェンタドールJ×フェラーリF12
ポルシェ ボクスター×メルセデス・ベンツ S



コンセプトカーで見てきた日産人気モデルの未来 次期エクストレイル×ノートへの期待

極上の180SXがなんと59万円! なんです

物欲企画
超お買い得な激安カーグッズテスト⑧
9インチまで出た! デカ顔カーナビ研究
春の新作“低燃費”タイヤコレクション

電話の
ミラー・ジュ・特撮
2選発!

初試乗!!

名車回想後編
サイボーグを
憶えているか

本当の自分はワルキヤラで、アウトローな自動車評論家なのかも…。でも、だからこそ言いたいことが言える。



▲太田の執筆風景。事務所で編集者と次の号でどんなネタで書くかを綿密に打ち合わせして、構想をふくらませてから原稿を書き始めるという。締め切りはちゃんと守るほう、かな。

自分の知らぬ間に大きく変貌していたクルマたち

浦島太郎の目には、やけにミニバンが増えている。またそれまでの作り手主導のクルマ作りではなく、広告代理店のリマサリチによるマーケティング主導の手法に変わっていったことも驚きだった。印象的だったのは、ヴィッツをベースにしたファンカーゴやイストなど、派生車がとて増えていたことだ。そして細かくユーザーイメージが懸られること。

たとえば「東急沿線の〇〇駅に住む30代の夫婦で子どもはいない。年収はいくらいくらで、ライフスタイルはウィークデーは奥様が朝ご主人を駅までクルマで送って行き、その帰りにテニスサークルに…」など、あたかも実在の人物がしているように、その変化は少しずつ起こっていたのだが、5年間経っていった頃からみると、驚きの連続だった。

一方で、専門誌でページの多くを割かれる。たとえば「最新に聞いたら「業界の異端児」だそうで、浦島太郎はそんなこと知らないものだから仕事を引き受けてしまった。

「あそこが仕事をしたらもう他から仕事がないよ、CO2Yの減額委員に属することも絶対無理だよ」と言われた。

可哀想な浦島太郎は、何か理由をつけて「行かない」と伝えたら、Xの編集長から電話がかかってきた。「あの太田君がおもねるの、もっと芯がある人物だと思っていた。見直さなければならぬニヤンスを言われた」「ナニッ」と思っ、ここで断ったら男が腹を思い、行くことになった。

でも黙って行くのは嫌だから、取材先のメーカーの広報に「マガジンXと行くんだけど記事にされて困るなら行かないけどどう？」と言ったら「どうも来てください」と、そりゃ「やめてください」とは言えないわな。毎週こんな脅しみたいなことをしていたら、そのうちメーカーも試乗会に僕を呼ばなくなるだろうな。

当時の担当編集者リタに話した

クルマの評論は言いたいことを言おう。けなすだけでなく根拠を明確にする。印象批評は避け、自分なりの改善策を提案する。その批評には愛があった（と思う）。



4クルマの開発者には敬意を持って書くが、試乗してみても太田が感じたことは率直に伝える。それが「車口」と言われることが多いのは、レースというクルマに厳しい環境に長く身を置いたからかも。

1を自指し、結果がすべてとされる世界で十数年プロとしてやってきた。だから自己主張が強くて、も仕方がないのだ（と感嘆する）。まして僕のような、カート出身のエリートではなく、いわば雑草レーサーは、修業時代に映画「汚れた英雄」みたいなワルを多かれ少なかれやってきている。そしてプロとなつて急いで大金を手にし、急に業界交友関係が増え、バカな遊びと無駄遣い。特殊な人物にならないはずがない。

しかしそうしただけではなく、事故後の現場もワルキヤラに影響を与えているだろう。現在の担当編集者カトーによれば「太田さんはかなり車口」、ニッポン放送（ラジオ）のアナウンサーは「太田さんは「二刀流」。言いたいことを言っているし、そう思われているように、言っても許される空気も感じる。

「この執筆スタイルに影響を与えた自動車誌」これはマガジンXという自動車雑誌の影響もある。同誌も僕が事故後、仕事が少ない時に依頼してきたひとつなのだが、業界で認められたホリデーオートとは違い、Xは大変だった。

初めて試乗会に取材に行く時のこと、担当から「僕たちは行かないことにして太田さんの名前予約してください」と言われた。「アツという意味？」

普通、自動車専門誌はメーカーにそれなりに配慮した記事を書くものだが、Xは新車スクープをスツバ抜き、メーカーを叩く姿勢だ。メーカーからの広げが入らないからへっちゃらなのだが、事情通の関係者

の〇〇は最善の〇〇」的なマイナーチェンジの詳細や「ゴルフバッグが何個あるか？」というような比較記事には、関心を持ってない。そうした事象は、継続的に情報に触れれば興味があくのだろうが、何しろ浦島太郎だから、悪態を出さない。

浦島太郎自身の「変化」には興味を沸かした。ドラスティックな社会の変化とそれに追いつくこととして追いつけないでいる自分とのギャップ。つまり社会と僕の衝突の様子が興味深い。

むしろるように乗った。乗ると作り手の顔が見える。まあ、たまに見えてこないものもあって、それはあまり大したことないクルマなんだけども。

ミニバンに関しては、それまで家族のために自分を捨てた人が乗るクルマだと決めつけていたけど、いろいろと乗ってみると、運転して楽しいミニバンもあって、かと思つてすべて家族のためという純然たるファミリー志向もあって、様々な特徴がある。これはユーザーの生活や価値観の変化を反映しているんだなと気づいた。

「自己主張が強いのはプロレーサーだったから」

「ここで改めて、モータージャーナリストとしての太田君は、たう「イインじゃない。太田さんはアウトサイダーだからさ」と言っている。アウトサイダーって、業界の仲間外れってこと？、ひとりでこの旗を立てていて、ちばんツライ言葉なんだけど…。まあいいや（笑）。

しかし結果的には、ほとんどのメーカーは僕を案内し続けてくれた。どうせ他の自動車専門誌からの依頼はもうないだろう。H&Aも担当編集者が替わったから終わらさう。それなら言いたいことを言おう。担当と打ち合わせたのは、けなすだけでなく根拠を明確にする。印象批評は避ける。自分なりの改善策を提案する。批評には愛があった

を自己紹介しよう。どこをどう読んだのか、おそらくテレビなどで僕のドキュメント番組をちらっと見たような人なのだろうが、僕をとても「良い人」だと勘違いしている人がいる。ファンレターにも「素晴らしいです！」と賞賛の嵐で、それはそれでうれしけれど、でもやっぱり違う。「ワラッショ」リパース」などの僕の著書や、この連載の初回からの読者は、真実を知っているだろう。僕のキャラが違つてくると。

テレビの人気バラエティ番組「アメトリーク」の「僕たちは、〇〇其人です」風に言うなら、「僕はワルキヤラ・モータージャーナリストです！」ということになるのだから、ご想像。

「でもその出自がレーサーだ、レーサーってでもと」僕が「一番」と思っているし、そしてワガママが美德とされる世界で生きてきた。モータージャーナリストでレーサーの肩書きを持つ人はいるけど、多くは二つの仕事を平行してこなしてキャリアを積み上げた人がほとんどだろう。僕のように純然たる職業レーサーを長くやっていて、それから逆に自動車雑誌業界に入ってきて記事を書くようになった者は近年はいないと思う。

学校を卒業して職業ドライバーになる。テレビで聞いたが、僕のようなハンデを持った人が社会復帰できる率は4%程度だとさうだとうやって計った数字なんだだろう。まあ元々ゼロからのスタートだから、遠慮せず自分の正しいと思つたことをやっていこう。そう思つてやっていた。

こうして僕は業界の本流から外れ、見事「アウトロー」の地位を手にした。これが自他ともに認めるワルキヤラ・モータージャーナリストの誕生地獄だ。さて次号では、ワルキヤラからみた自動車評論の現状と遠見、そして明るいクルマの未来について大いにぶちまけた。

担当編集者カトーのつぶやき
太田さんって意外に気さくなんです

僕がこのコラムを担当させていただくようになってまもなく2年になります。担当する前は、太田さんって気さくなのかな、と思っていたのですが、実際に会って話してみると話してみると気さくな人柄で、意外にも(竹)竹と社長があったんですよね。とにかく思ったこと、考えたことをズバズバと話してくれるので、小気味いいという爽快感がいろいろか、とにかく話を聞いて楽しいんです！ 毎月、コラムネタの打ち合わせで2時間程度お話しさせていただきますが、太田さんは僕の言うこともしつかり聞いてくれて、「それはどういうことなの？」と疑問もはっきりとぶつけてきてくれます。

おそらくこの感覚がこのコラムにも反映されていて、率直な感想のない意見というのが読者のみなさまにもウケている理由かと思えます。太田さんのような方がある意味貴重な存在で、時には厳しいことを書いていただくことで、もっとクルマ業界が発展していくのではないのでしょうか。今後もズバズバと書きたいことを書いていただければと思います。これからも協力をさせていただきますので、よろしくお願ひします。